

(2)「真のお母様を地上世界から探し出す」というみ言をもって、「お母様の無原罪誕生」を  
否定しようとする誤り

真のお父様は、「主（再臨主）がこの地上で探される新婦は……墮落していない純粋な血統をもって生まれた方」（「祝福家庭と理想天国Ⅰ」909ページ）であると語っておられます。これは、真のお母様の語られる「独り娘」のみ言が正しいことを裏づけるみ言です。

真のお父様は「（メシヤは）愛する子供一人で何になるか。子供自体は、その相対者（真の母）を得

なければならぬ。相対者をどこから得るか。天上から得るんじゃない。墮落の結果地上で失ったんだから、地上で再創造しなければならぬ」（「祝福家庭と理想天国Ⅱ」872ページ参照）と述べておられますが、それに対しUCIを支持する人物は、お母様を天上（霊界）からではなく、地上世界から探し出すということをもって「お母様の無原罪誕生」を否定しようとしています。しかし、このみ言は、イエス様が地上で「真の母」を探し立てることができず、十字架の後、復活されてから聖霊という「霊的眞の母」を立てられました。そのようにして「天上から得る」のではなく、地上で実体であられる「眞の母」を探し立てなければならぬことを意味するみ言です。

私たちが理解しておかなければならないことは、「原理講論」の「終末論」に、「人類歴史の目的は、生命の木を中心とするエデンの園を復帰するところにある。ところで、エデンの園とは……地球全体を意味するのである」（145ページ）と論じられているように、「エデンの園」が、地上世界を意味しているという事実です。

再臨主の誕生についても、「再臨が、地上に肉身をもって誕生されることによつてなされる」（「原理講論」577ページ）と論じられているように、人類歴史の終末期において、メシヤが再臨されるならば、この地上世界に「復帰されたエデンの園」が再現され、メシヤはそのエデンの園（地上世界）においてエバ（真の母）を探し出されて聖婚されるのです。それゆえ、地上世界から探し出して復帰する、というみ言をもって、「真のお母様の無原罪誕生」を否定する根拠とはなりません。

②人間始祖の「霊的墮落のみのときの救援摂理」について

エデンの園の中にいるエバは、無原罪<sup>①</sup>であり、神の血統<sup>②</sup>であることを知らなければなりません。エデンの園のエバは、霊的墮落をしたとしても、まだ神の救いのみ手が届く圏内にいたのです。ところで、UCIやサンクチュアリ教会を支持する人々が、「お母様は無原罪で誕生された方ではない」として、真のお母様の無原罪誕生を否定するために用いるみ言に、次のみ言があります。

「アダムが責任を果たすことができなかつたために墮落したので、その責任を完成した基準に立つには、エバを墮落圏から復帰して再創造し、善の娘として立つたという基準に立てなければなりません。そのようにしなければ、アダムの完成圏が復帰できないのです」〔真の父母の絶対価値と民族的メシヤの道〕  
38 ページ

「真の母がサタンに奪われたので、本来の人間（メシヤ）は、死を覚悟してまでも、サタン世界から（真の母を）奪い返してこなければなりません」〔祝福家庭と理想天国Ⅰ〕561 ページ

真のお父様は、天の父母様（神様）と完全一体となつておられ、その語られるみ言に矛盾はありません。前述したお父様のみ言にあるように、真のお母様は、独り娘<sup>③</sup>としてお生まれになっています。では、これら二つのみ言をどのように理解すべきでしょうか。

真のお父様が、「アダムが責任を果たすことができなかつたために墮落したので……」とか、「真の母がサタンに奪われたので、本来の人間（メシヤ）は、死を覚悟してまでも……」と語っておられるように、

これらのみ言は「エデンの園」において起こったアダムの墮落の問題に対する、メシヤ（アダム）自身による**蕩滅**、メシヤ（アダム）自身の責任、について述べているものです。

「原理講論」には、失樂園前の「エデンの園」において、もし、アダムが墮落せずに完成していたならば、復帰摂理はごく容易であったとして、次のように記しています。

「エバが（霊的）墮落したとしても、もしアダムが、罪を犯したエバを相手にしないで完成したなら、完成した主体が、そのまま残っているがゆえに、その対象であるエバに対する復帰摂理は、ごく容易であつたはずである。しかし、アダムまで墮落してしまったので、サタンの血統を継承した人類が、今日まで生み殖えてきたのである」（111ページ）

この「原理講論」の記述は、いわば「霊的墮落のみのときの救援摂理」と呼ぶべきものであり、たとえエバが「霊的墮落」をしたとしても、もしアダムが成長期間を全うし、完成したアダム。になつていれば、復帰摂理はごく容易に成されていきました。しかし、アダムが完成できないまま、「肉的墮落」をすることで「サタンの血統を継承した人類が、今日まで生み殖えてきた」というのです。結局、エデンの園のアダムは、エバを天使長から取り戻すことができませんでした。

それゆえ、人類歴史の終末期において、メシヤが来られたならば、メシヤは地上世界の「エデンの園」の中において、人間始祖アダムが果たしえなかった責任である、上述した「霊的墮落のみのときの救援

摂理」の内容を、蕩滅復帰しなければなりません。

ところで、失樂園前の「エデンの園」の中にいたエバは、**霊的墮落**をしたとしても、その時点においては、まだ「原罪」を持っておらず、「サタンの血統」にも連結されていません。すなわち、原罪とは「人間始祖が犯した**霊的墮落**と**肉的墮落**による**血統的な罪**」（「原理講論」121ページ）をいうのであり、エバの**霊的墮落**だけでは、エバの**自犯罪**であり、「**血統的な罪**」とはなっており、また「原罪」ではありません。事実、**霊的墮落**の時点において「**失樂園**」は起こっており、アダムが完成してエバを救済したならば、「失樂園」は絶対に起こりえなかったのです。ゆえに「**霊的墮落**」が起こった時点でのアダムとエバは、まだ「エデンの園」の中にいる状況です。

また、真のお父様が「愛には縦的愛と横的愛があります。父子関係は縦的愛であり、夫婦関係は横的關係です。縦的愛は血統的につながり、夫婦関係は血統的につながりません」（『訪韓修練会御言葉集』12ページ）と語っておられるように、天使長とエバの**霊的墮落**は、横的愛の問題としての、**偽りの夫婦関係**であり、その時点では、エバは「サタンの血統」に連結されているわけではありません。お父様が、「**長子（アダム）が庶子のようにになりました。血筋が変わりました。本然の愛を通して神様の血統を受け継ぐべきでしたが、（肉的）墮落することによって他（サタン）の血筋を受け継ぎました**」（八大教材・教本「天聖經」186ページ）と語っておられるように、人間始祖アダムとエバは、「**肉的墮落**」をすることによって「サタンを中心として四位基台を造成したので、サタンを中心とする三位一体」となり、サタンの血統に連結するようになったのです（『原理講論』267ページ）。

それゆえ「原理講論」に記されているとおり、肉的墮落によりサタンを中心とした。悪なる三位一体をつくる以前の霊的墮落のみの時点では、サタンの血統に連結していないため、「復帰摂理は、ごく容易であった」(「イーページ」というわけ)です。

そして、メシヤが地上に來られるならば、地上世界において、復帰された「エデンの園」で、人間始祖のアダム自身が果たせなかった「エバを墮落園から復帰して再創造し……」「サタン世界から奪い返して……」という「霊的墮落のみのときの救援摂理」を、メシヤご自身がアダムに代わって蕩滅復帰しなければならぬのです。

### ③ 「墮落園から……」「サタン世界から……」というみ言は何を意味するのか？

ところで、地上において復帰(再現)された「エデンの園」には、人間始祖のときと同様、そこに、メシヤ(アダム)と三人の天使長、および独り娘(エバ)が存在することになります【左図を参照】。そして、復帰された「エデンの園」の中にいる独り娘は、やはり人間始祖のときと同様に、聖婚する前から、「神の血統」であり、「無原罪」なのです。この点については、前述した真のお父様のみ言のとおりです。

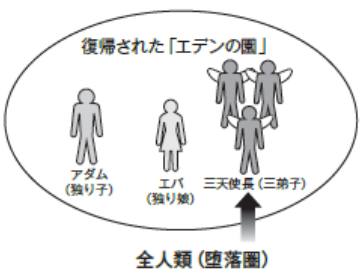
しかしながら、復帰(再現)された「エデンの園」にいる三人の天使長は、洗礼ヨハネ的人物をはじめとする「メシヤのための基台」として、メシヤご自身が「サタン世界」(墮落園(墮落人類))で闘って勝利して、取り戻してこなければならぬ基台なのです。前述したみ言の「エバを墮落園から復帰し……」「サタン世界から奪い返して……」という場合の「墮落園」「サタン世界」とは、まさしくメシヤご自身が闘って自然屈伏させて取り戻すという、三人の天使長の状況そのものを指して語っておられるものです。すなわち、「墮落園」「サタン世界」とは、具体的には、墮落した天使長園のことを指しており、そこから取り戻すことを意味しているみ言なのです。

「三人の天使長」の基台が確立すれば、「エデンの園」が再現され、独り娘が顕現する条件が備わるということであって、エバそのものが、「墮落園」(墮落している)「サタン世界」(サタンの血統)という意味ではありません。再現された「エデンの園」の中にいるエバは無原罪であり、神の血統です。

したがって、メシヤは命懸けでサタンと闘って勝利することで、三人の天使長園を自然屈伏させ、「メシヤのための基台」(三弟子)を確立しない限り、天使長園(墮落園)「サタン世界」からエバを奪い返して、「聖婚式」を挙げることはできません。これらの二つのみ言は、メシヤ(アダム)自身による蕩滅、メシヤ(アダム)自身の責任、について述べているものです。

一方、真のお父様が、前述のみ言で語っておられるように、「真の母」となる「エデンの園」の中にいる独り娘は「墮落していない純粹な血統をもって生まれた方」です。

ところが、その「独り娘」(エバ)の場合も、人間始祖のエバが「エ





デンの園」で蕩滅できず、歴史的に残ってしまった。『靈的墮落』の問題を、墮落したエバに代わって『蕩滅』(『靈的墮落のみのときの救援摂理』)していかねばなりません。真のお母様が、一九六〇年のご聖婚以来、「神の日」宣布までの七年間、苦難の路程を歩まれたのは、人間始祖のエバに代わって『蕩滅』され、独り子(再臨メシヤ)の前に完全相対である『独り娘』として立つためであったと言えるのです。

ただし、ここで勘違いしてはならないのは、真のお母様が「靈的墮落のみのときの救援摂理」をエバに代わって『蕩滅』されるといっても、それは、お母様ご自身が「靈的墮落」をしておられるという意味ではないという点です。「靈的墮落」の罪を犯したのは、あくまでも人間始祖エバであり、お母様はそのエバを代理して「靈的墮落」を『蕩滅』されたのです。

真のお母様は「無原罪」であられ、かつ「神の血統」であるがゆえに、長成期完成級をつまづくことなく越えられ、完成期の七年路程を人間始祖エバに代わって歩まれることで、真の父(アダム)と共に、勝利された人類の「真の父母」となられたのです。

(7) お母様は「神様を根として現れた主人公」

「原理講論」には、「父は一人ですべての子女を生むことができるだろうか。墮落した子女を、善の子女として、新たに生み直して下さるためには、真の父と共に、真の母がいなければならぬ。」(26

4(265ページ)と記されています。すなわち、重生するには「真の父」と「真の母」のお二人が必要で、すでに述べたように、もし、真のお母様が約婚や聖婚をされたときに原罪を清算し、初めて『神の血統』に生み変えられたとするならば、それは『父一人』で生み変えたことになるために、「原理」が説く「重生論」と相容れません。ゆえにお母様は、約婚や聖婚をされる前から、神の血統であったとの結論に帰結するのです。

事実、真のお父様は、真のお母様に対し、「神様を根として初めて歴史上に……現れた主人公」であるとして、次のように語っておられます。

「統一教会の文先生を、何と言いますか。(真の父母様) 真の父と言うでしょう? ここにいる韓鶴子氏は? (真のお母様) 真の母だと言うでしょう? (はい) 真の父だと言うでしょう? (はい) いくら見ても目も二つ、鼻も同じなのに、何が違いますか? 根が違うのです。根が。皆さんは、サタンの世界の墮落した父母を通した墮落の根を生まれ持ちましたが、統一教会の文某と、ここにいる文鶴子、文鶴子(文学者)でしょう? 世界に文学者(注、韓国語で文鶴子と発音が同じ)があまりに大勢いてはいけません、韓鶴子、たった一人の(ハン) 鶴子……。鶴子様は根が違うのです。神様を根として初めて、歴史上に真なる愛の論理を中心とした統一論理を持って現れた主人公だということです」(マルスム選集148-40-41)

このように、真のお父様は、私たちには「皆さんは、サタン世界の墮落した父母を通した墮落の根を生まれ持ちました」と述べ、その対比として「統一教会の文某と、ここにいる韓鶴子……たった一人の鶴子、鶴子様は根が違う」と語られ、真のお母様は「墮落の根」から生まれたのではなく、「神様を根として……現れた主人公」であると述べておられます。

真のお父様は、真のお母様（韓鶴子総裁）が、墮落していない純粋な血統を持って生まれた方であると述べるにとどまらず、お母様も、お父様と同様に「神様を根」としてお生まれになった方である事実を明らかにしておられるのです。

私たちは、真のお母様の語られる「独り娘」のみ言が真理である事実を明確にしておかなければなりません。